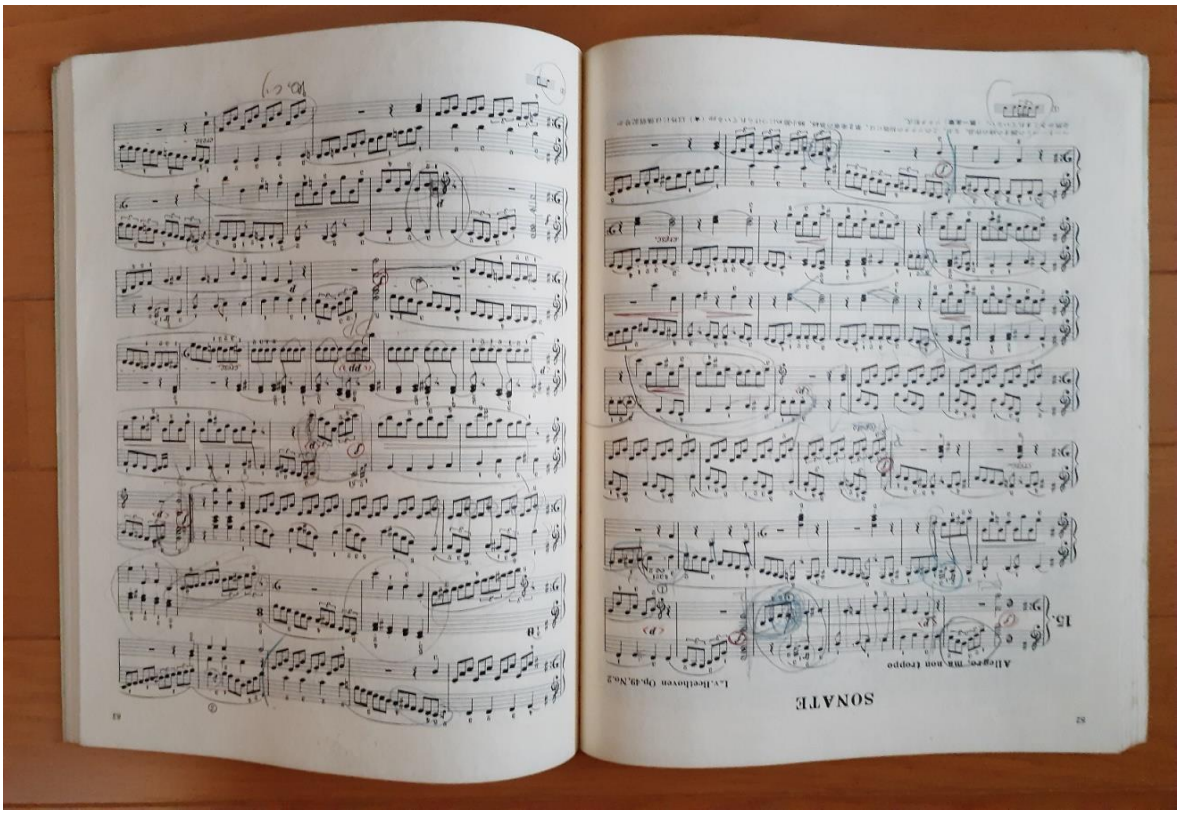
essais こころみ　2025年3月

2025年3月3日（月）　　はるか昔、ピアノの発表会で弾いた曲の楽譜



転職の合間、たまたま新聞のチラシにピアノ教室の案内。ヒマにまかせて習い始め、先生が発表会参加を勧めてくれて、練習。当日会場へいってみてビックリ。子供たちの発表会に大人一人演奏。親御さんたちの目を丸くした表情が印象的でした。それにしても教室の先生はよく黙っていてくれました。もし子供たちのものと知っていたら、手をあげなかった。良い経験ができて感謝。せっかくだからアルバムから写真をとりだして…。発表会の日付は1984年４月29日でした。

2025年3月3日（月）　雨

昨夜から本降り、明日にかけても雨の予報。１日の土曜はよく晴れ、温かく、春本番をおもわせたが、まだ先のおたのしみ。

―　学びはうそをつかない　（2）　－

『先天と後天、学びのパノラマ』⑤

「社会の変化を先取りして感じることができる。外国人として生活する者にはそういうセンスが養われる」。友人がそう言ったとき、そんな風に考えたことがなかったので、目が開いた。それはあり得る。

コミュニケーションのとり方については、「外国人」なんだと気づくことになった、独立してから。「世間」という言葉は知っていても、概念や感覚は、自分にはまったくないことを知った。

さらに社会や時代を読むことに繋げて考えるまでには至らなかった。社会に目をむける度合が比較的高い、たぶん。でもそれは自分自身の志向性と仕事柄のなせるワザだと、漠然と考えていた。

あらためて考えてみると、たしかに腑に落ちた。ふり返ってみれば、今でいう多様性を許容する世界や場に身をおいてきた。社会は変っても、普遍的な価値を大切にする世界を察知して。

「外国人」という生まれもった条件が養ってくれた力はけっこうあるのではないか。社会の空気や集団の文化性をかぎ分けるような力。たぶん社会的知性の下地になっている。

過去から現在、あまり不愉快な想いをせずやってこられたのは、自分の守りたいものの究極＝自分の精神性を冒しそうなものを、ある程度回避できてきたおかげではないか。

しらず知らず学びとっていたものが仕事やプライベートの生活で生きてきた。学びそのものって目に見えにくいけど、人の営みをたどれば、水脈として道すじをつけている。

2025年3月5日（水）啓蟄　雨

今日も雨、晴れてくるのは明日になるよう。関東は都内でも雪、土曜は春めいていての急冷。寒暖の差が激しく、カラダに堪えそう。

―　学びはうそをつかない　(2)　－

『先天と後天、学びのパノラマ』⑥

外国人であることが社会的知性を養ったことは間違いないが、それだけなはずはない。他の大事な要素として、父が早く逝ったこととときょうだいが多いことの２つがある、たぶん。

６人きょうだいの一番目、13才で生活環境は一変した。ただ父の薫陶はしっかり身に入り込んだ年齢であった。それらが先天的な質を刺激して、観察眼を養った気がする。

親をふくめ、大人の浅はかさ、狡猾さ、非情さをみる一方で、善良さ、誠実さ、真実さをみた。おそらく16才までのうちに、人間の〈さま〉を捉え、のちの読書でそれを確定させた、といえるかもしれない。

きょうだいが６人だったのは、たぶん、さいわいした。中井久夫先生が書いていたように、「５人以上になると、親との相互作用よりも、きょうだいどうしの相互作業が重要になってくる」。

ましてや一人になった母にすれば、全員に関わっておられない。子の人生のはやい段階から親があまり口出ししなかったのは、これは大いにさいわいしたと思う。

親との軋轢、葛藤を抱える人の多いことを仕事を通して知った。その反動をパワーにする人もいるが、親のはめた枠にとらわれてけっこう心の重しになっている人もいる。

ときどき人から、「つよい」とか、「バランスがいい」とか言ってもらう。なぜそんな風にみえるのか。自分では、人間らしい人間といっている。自分を守るための本能がしっかり働き、対処する。

生まれ持った質そのものが、「つよい」とは思わないが、「バランスがいい」とは思う。その質からすれば、１０代そこそこでの環境急変が糧になり、バランス保持に磨きをかけた、といえるか。

2025年3月7日（金）　晴れ

昨夕から晴れてきた。早朝は雲が多かった。でもようやく陽がさしてきた。今日はまだ寒い。でも陽ざしは春。

―　学びはうそをつかない　(2)　－

『先天と後天、学びのパノラマ』⑦

晩年期にさしかかると誰でも現在に至る人生の運びに感慨をもつもの。個人的にも、よくぞこういう風に展開してきたなぁ、きているなぁと不思議におもう。

仕事でたくさんの人と出会い、込み入った話も聴くことになる。人それぞれの持って生まれたものや、環境の違い、はたまた宿命と運命の刺激合いというか、駆け引きというか、複雑すぎて、もう「幽玄さ」といいたくなる　人一生。

その人ならではの先天的なものが、後天的な状況からその人の学びかたを促し、年齢をかさねながら、その学びが指数関数的に蓄積されて、その人だけの自分史となる、物語ができる。

老いて、その自分史に「〇」をつける人もいれば、「△｝あるいは「×」？
となると、それは少しさみしいけど、そこで必要になるのが、「智恵」か。

2008年の２月から４月にかけて、『無の探求』（梅原猛　柳田聖山）を読んだ。禅について書かれたもの。なぜ読む気になったのか、別の本を読んでいて、その気になったのかもしれない。ただ、そう簡単に読み解ける内容でない。腑に落ちる一文を見つけただけでよしとした。

やすらぎ（定）は智恵にそのすわりをゆずる

いま再読している『数学する人生』にも「智恵」はよく出てくる。ここは辞書の説明を。「（智慧）仏語。相対世界に向かう働きの智と、悟りを導く精神作用の慧。物事をありのままに把握し、真理を見極める認識力」

よくもわるくも、結果をうけとめ、それもこれも、自分で運んできた人生と自分に言い聞かせ、心を落ち着かせる。なかなかそうできるものではないけど、人間は学ぶ生きものだから、繰り返すうち、心にすわる。

「やすらぎ」＝穏やかなゆったりとした気分。いつもそうありたいもの。

2025年3月10日（月）　晴れ

早朝からよく晴れている。気温も15℃まであがる予報。1月半ばに反転した日の出時間、今朝はそれが目にみえてきた。同じ時間なのに、明るくなってきた。あぁ、春。

―　学びはうそをつかない　（3）　－

『読書の真価、世界の深化』①

「学び」は、ものごとのについて自分なりの答を得たことを指すのだろうと思う。でもなかなか確定にはならない。年月をかさねながらバージョンアップしていく。

学びはそもそも自分のためのものだが、人のためになって自分もいきるわけだから、もし自分より若い人から何かしら頼りにされるようになったなら、それなりによい学びをかさねてきたと胸をなでおろしていい。

そう、最近そんな心境にある。残り時間はもう少ないのだから、そろそろ自分の歩みを自己評価しても差しつかえない。とりあえずほっとしているのは、少しは大人になった、ということ。

若い頃のなんと未熟だったこと。独立する判断は本当に正解だった。よくぞ実践したと我ながら、「自分を褒めてあげたい」。人に問われ、試され、、また、人に恵まれ、励まされ、学びの旅は続き、今も続けられているから。

おのずと考えさせられる。おそらく生まれつき考える質であるところに、さらに考えさせれる状況。特に事務所を開設した1995年3月からの3年は、過ぎてみれば珠玉、でも当時は混沌。

　ひょっとして見当違いのことを始めたか？　そんな目線をもつ羽目になった。実際そうなら、やる意味がない。答え捜しにまず手にしたのが、本。古今東西の多様な知にあたることができる。やはり本になる。